

第 48 図 石器分類別重量比 (11 ~ 50mm) 2

尻遺跡の評価は難しいが、他の 2 遺跡の状況を踏まえれば、備讃瀬戸北岸では金山型剥片剥離技術は用いられず、直接打法もさほど認められないと言えそうだ。

註

- 1 分析対象資料は保管資料の一部であるが、遺跡によっては 1/2 程度の資料を計測しており、おおまかな傾向は把握できると考える。以下に対象とした遺構名を記しておく。東坂元北岡遺跡:SR01 報告・未報告資料 / 川津一ノ又遺跡:SD59/100 未報告資料 / 長者原遺跡:包含層未報告資料 / 矢ノ塚遺跡:SD85036・85101・85102・85124 報告資料 (1/2)・未報告資料 / 城遺跡:包含層と推測される未報告資料 / 池尻遺跡:倉敷市教育委員会調査南区包含層、南区攪乱 / 矢部堀越遺跡:包含層を中心とする資料
- 2 備讃瀬戸北岸の 3 遺跡については、各所蔵機関の協力を得て乗松が計測した。今回は「打面調整」、「直接打法」の剥片の抽出にとどまったため、「両極打法」、「不明」、「石核」は分類できておらず、一部「成品」が含まれる可能性も否定できない。

第 4 節 中継地としての東坂元北岡遺跡

1 遺跡の類型

本節では、第 3 節を踏まえた他遺跡との比較から東坂元北岡遺跡の評価を試みる。

分析した 8 遺跡は、石器の分類やサイズ、比率などから a ~ f の類型に分けられ、原産地である金山との位置関係も念頭に置きながら、それぞれの性格を読み解いてみたい。

類型	遺跡	石器のサイズ	11 ～ 50mm の比	11 ～ 50mm の「打面調整」「直接打法」「両極打法」の重量比	「成品」を除く重量比
a	東坂元北岡	・ 21 ～ 30mm の比率が突出して高い。	・ c・d に比べて「不明」「石核」「成品」の比率は低く、打法の判明する剥片で 50%前後を占める。	・ 「打面調整」の比率が高い。 ・ 「打面調整」「直接打法」で 80%強を占める。	・ 「打面調整」「直接打法」で 40%弱を占める。 ・ 「打面調整」が 20%強を占める。
b	川津一ノ又	・ 21 ～ 30mm の比率が突出して高い。	・ c・d に比べて「不明」「石核」「成品」の比率は低く、打法の判明する剥片で 50%前後を占める。	・ a ほどではないが「打面調整」の比率が高い。 ・ 「打面調整」「直接打法」で 60%強を占める。	・ 「打面調整」「直接打法」で 20%弱を占める。
c	長者原	・ 21 ～ 30mm の比率が高い。 ・ 31 ～ 40mm の比率も 20%強ある。 ・ 71 ～ 140mm の個体が a・b・d に比べると多い。	・ a・b・d に比べて「不明」の比率が高い。 ・ a・b に比べて「石核」の比率が高い。	・ a・b に比べると「打面調整」は少ない。 ・ 「打面調整」と「直接打法」を合わせた割合と「両極打法」の割合が半数前後である。	・ 「打面調整」「直接打法」は 10%弱である。 ・ 「打面調整」は 2%前後にとどまる。
d	矢ノ塚	・ 21 ～ 30mm の比率が高い。 ・ 31 ～ 40mm の比率も 20%強ある。	・ a・b・c に比べて「成品」の比率が高い。 ・ a・b・c に比べて「石核」の比率が高い。	・ 「打面調整」は少量。 ・ 「打面調整」と「直接打法」を合わせても 20%弱にとどまる。 ・ 「両極打法」が 80%以上を占める。	・ 「打面調整」「直接打法」は 4%前後である。 ・ 「打面調整」は 1%前後にとどまる。
e	城、矢部堀越				・ 「打面調整」はない。 ・ 「直接打法」は 8%程度である。
f	池尻				・ 「打面調整」はない。 ・ 「直接打法」は 1%程度にとどまる。

第 2 表 遺跡類型

a 東坂元北岡遺跡

東坂元北岡遺跡では、板状石核から金山型剥片剥離技術を用いて石庖丁を生産し、さらには打製石剣やスクレイパー、石鏃なども製作もしている（第 2 節）。加えて、高比率の「打面調整」は金山型剥片の剥ぎ取り（工程を進めた打製石庖丁の仕上げも含む）を高い頻度で行っていることを示している。両極打法から石鏃や石錐への加工も復元したが、「両極打法」の比率の低さから、b ～ d に比べればその生産割合は限られるものと思われる。

このような、金山産サヌカイトの板状剥片（やそれに近い状態）を入手し、主に金山型剥片剥離技術を用いて成品や金山型剥片に加工する集落を a とする。出土した石庖丁などの成品にほとんど使用痕（打製石庖丁の磨耗など）が認められないことから、加工された石器の多くは別の集落に搬出されるものと考えたい。

b 川津一ノ又遺跡

a ほどではないが、川津一ノ又遺跡における「打面調整」の一定量の存在は、金山型剥片剥離技術による加工を示唆している。それを裏付けるように打製石庖丁の失敗品とみられる剥片も散見される。工程 3-1 ～ 3-2、さらには打製石庖丁の完成までを行っていたことは確実である。a を参考にすれば工程 2-1 ～ 2-2 もありうる。一方、「両極打法」は a よりも多く、バルブの発達しない剥片を素材とする石鏃などの生産もある程度行っていたと考えられる。

金山型剥片やそれを素材とする成品を生産しているのが b の集落である。サヌカイトは原石ではなく、板状素材程度に加工したものを持ち込んでいる可能性を考えておきたい。また、両極打法によって得られる剥片も成品に加工していた。ここで生産していた石器が自らの集落で使用されるものか、他へ持ち

出される目的なのかの断定は難しい。川津一ノ又遺跡では居住痕跡が確認できているため前者に限られる可能性もあるが、無理にどちらかに当てはめるよりも、石器生産の目的を並存してとらえるほうが自然だろう。

c 長者原遺跡

長者原遺跡はサヌカイト原産地である金山の一角に位置しており、容易に入手できる原石から加工を始めていることは疑いないだろう。71mm以上のサイズの大きな石器が多いのは、素直に原産地ならではの現象ととらえたい。 $a \cdot b \cdot d$ に比べて「不明」の割合が圧倒的に多いのは、この原石からの加工(たとえば、板状素材に分割できるまでの整形など)が理由として考えられる。多くはないが「打面調整」の存在や、折損した打製石庖丁の製作途中品の出土からは、金山型剥片剥離技術の全工程を行っているといえる。「不明・石核・成品」を除くと50%前後を占める「両極打法」は、一定量の両極打法による剥片剥離も推測させる。

原産地に位置するcは、金山型剥片剥離技術の全工程から成品の生産までを担い、金山型剥片剥離技術以外の手法による加工もある程度行う集落である。原産地での加工ということから、生産された石器のほとんどは他集落に搬出されるとみたい。

d 矢ノ塚遺跡

a～cに比べて比率の高さがやや目立つ「石核」は、ほとんどが両極打法の石核(いわゆる「楔形石器」を含む)である。この点は「両極打法」の圧倒的多数と相関関係にあり、両極打法による加工が主体である。わずかに「打面調整」も認められることから、金山型剥片剥離技術の一部工程も行われていないわけではないが、頻度は限られるだろう。「成品」が多く出土しているが、金山型剥片を素材とする打製石庖丁などは外から持ち込まれた蓋然性が高い。打製石庖丁を両極打法の石核とする例もまま見受けられる。

dは、他集落から成品や剥片を持ち込み、必要な場合にはこれらを石核とする両極打法での加工を主体とする集落である。金山型剥片剥離技術については限定的に用いられている。

e 城遺跡 矢部堀越遺跡

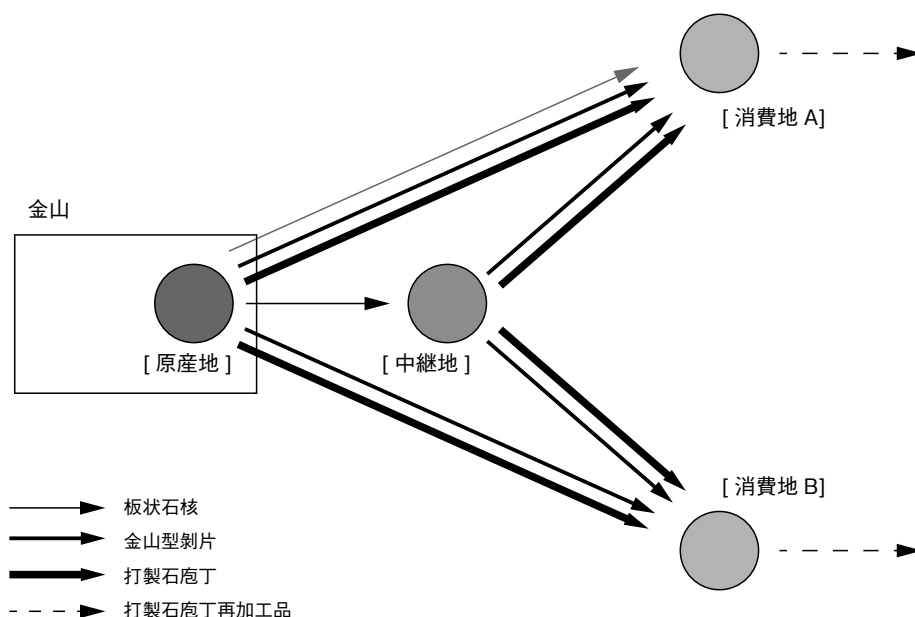
城遺跡、矢部堀越遺跡で「打面調整」が認められず、「直接打法」比率も少ないのは、金山型剥片剥離技術が行われていないことを示している。「両極打法」がどの程度を占めるのかは不明だが、おそらくは両極打法による加工が主になっているのだろう。

搬入した成品や剥片を加工するにあたり、金山型剥片剥離技術を用いないのがeの集落になる。

f 池尻遺跡

eと同様に「打面調整」がないため金山型剥片剥離技術は行われていないだろう。「直接打法」の比率は $d \cdot e$ (「打面調整」含む)よりも多い。「両極打法・不明・石核」の比率が不明ではあるが、eに比べると両極打法への傾斜が少ないのかもしれない。

fの集落でも金山型剥片剥離技術は用いられないが、eよりも直接打法の志向性が高い。



第 49 図 金山産サヌカイト製石器流通模式図

2 金山産サヌカイト製石器の流通

金山産サヌカイト製石器、特に金山型剥片剥離技術による打製石庖丁（註 1）の加工と流通という視点から遺跡の類型は次のようにまとめることができる。

c：[原産地] / a・b：[中継地] / d：[消費地 A] / e・f：[消費地 B]

[原産地]は金山に位置する集落で、原石から成品までの加工を行う。成品はもちろん、加工途中の金山型剥片などを搬出している可能性も十分考えられる。百間川兼基遺跡（岡山市）や玉津田中遺跡では、背部と刃部に加工が施され、挟りが入らない状態の「打製石庖丁」が数点出土している。[中継地]に位置付けられる東坂元北岡遺跡出土の失敗品の状況も加味して考慮すると、金山周辺の[原産地]や[中継地]で生産される打製石庖丁は、挟りを伴って完成品にいたると推測できる。そうであれば、完成品手前の状態のものも流通しているとみたほうがよい（註 2）。

[中継地]は原石から加工が進んだ板状素材やそれに類する状態のものを[原産地]から入手し、金山型剥片剥離技術や他の手法を用いて完成品にまで仕上げる。生産品は、自らの集落で消費される場合もあるが、多くは他の集落に搬出されるのだろう。[原産地]で述べたように、加工途中の金山型剥片などを流通ルートに乗せている可能性もある。

[消費地]では基本的に[原産地]や[中継地]での生産品を受け入れて使用する。受け入れた石器を再加工し、さらに流通させていることもありうる（高田 2001）。限定的だが金山型剥片剥離技術を伴うのが[消費地 A]、伴わないのが[消費地 B]である。

以上のことから、東坂元北岡遺跡は金山型剥片剥離技術に傾斜した[中継地]と評価できる。こういった集落はこれまで明らかにされておらず、東坂元北岡遺跡で確認されたサヌカイト製石器は、弥生時代中期中葉～後葉における金山産サヌカイト製石器の生産と流通について一歩踏み込んで理解できる良好

な資料と評価できよう。

註

- 1 第 2 節で触れたように、東坂元北岡遺跡では打製石剣の素材に金山型剥片を使用していない可能性もあるため、打製石庖丁を基本とした流通状況を述べることにする。
- 2 金山型剥片が搬出されていたのか、金山型剥片に刃部調整と背部調整（またはどちらかのみ）が施されて流通していたのかは不明である。調整前の金山型剥片のほうが汎用性があるとみれば、前者の流通が主だったとも考えられる。

参考文献

- 上峯篤史 2012『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』雄山閣
- 上峯篤史 2013『縄文・弥生時代の石器製作における剥片形状の予測と制御』『立命館大学考古学論集 VI 和田晴吾先生定年退職記念論集』
- 高田浩司 2001「吉備における石器の生産と流通」『古代吉備』23
- 乗松真也 2006「弥生時代中期における漁業システムの変革と「高地性集落」」『古代文化』58-2
- 藤田 淳 1996「石器」兵庫県教育委員会編『兵庫県埋蔵文化財発掘調査報告 135-5 玉津田中遺跡—第 5 分冊—』
- 森下英治 2002「石器の生産と流通 —四国の弥生石器の概要と金山産サヌカイト—」『第 16 回古代学協会四国支部研究大会 弥生 時代前期末・中期初頭の動態 —研究発表要旨—』
- 森下英治 2005「弥生時代における金山サヌカイト原産地の利用状況について —弥生時代中期における金山型剥片剥離技術出現の意義—」『第 19 回古代学協会四国支部研究大会 原産地遺跡から時代を読む 発表資料集』

発掘調査報告書

- 青ノ山遺跡：丸亀市教育委員会編 1984『青ノ山 8・9 号墳発掘調査概報 —香川県丸亀市青ノ山山頂所在の後期、終末期古墳—』
- 池尻遺跡：間壁茂子 1969「児島・上之町保育園内遺跡」『倉敷考古館研究集報』6 / 倉敷埋蔵文化財センター編 1997『池尻遺跡 倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集』
- 川津一ノ又遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1997『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 26 冊 川津一ノ又遺跡 I』 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 30 冊 川津一ノ又遺跡 II』
- 川津川西遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告第 33 冊 川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 2000『国道 438 号川津橋橋梁改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津川西遺跡』
- 川津六反地遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2014『国道 438 号道路改良工事・県道富熊宇多津線道路改良工事・城山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津六反地遺跡 川津昭和遺跡』
- 川津東山田遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 38 冊 川津東山田遺跡 I』 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 41 冊 川津東山田遺跡 II』
- 北岸南遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2012『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 23 年度』
- 城遺跡：岡山県教育委員会編 1977『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (19) 倉敷市（児島）城遺跡発掘調査報告 —県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査—』
- 郡家大林上遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 17 冊 郡家大林上遺跡』
- 長者原遺跡：香川県教育委員会編 1979『香川県埋蔵文化財調査報告 一般国道 11 号坂出・丸亀バイパス建設に伴う』 / 香川県教育委員会編 1979『香川県埋蔵文化財調査年報』
- 玉津田中遺跡：兵庫県教育委員会編 1996『玉津田中遺跡』
- 飯山北土居遺跡：（本書）
- 東坂元秋常遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2008『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 東坂元秋常遺跡 I』 / 香川県埋蔵文化財センター編 2012『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 東坂元秋常遺跡 II』
- 東坂元三ノ池遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2008『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊 東坂元三ノ池遺跡』
- 矢部堀越遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編 1993『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82 矢部古墳群 A・矢部古墳群 B・矢部大ぐろ遺跡・矢部奥田遺跡・矢部堀越遺跡 山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6』